助け合いの心

大口明光学園中学校　三年　馬門　あや

人々はみな助け合って生きています。家族、クラスメイト、職場の同僚、近所の人。私も今までいろいろな人に助けてもらい、誰かを助けながら生きてきました。その中で、助け合う大切さを学びました。

しかし、このコロナ禍で、みんなで協力し、助け合う機会は減ったと思っていました。接触を避け、密を避け、マスクで顔を隠し、人と交流することも減りました。私の地域でも行事が次々になくなったり、規模が縮小したりしました。それらは、人と人との距離どころか、心の距離まで遠くしてしまったのではないかと思います。コロナウイルスに感染してしまって、誹謗中傷を受けたという話も聞きました。しかし、逆に、「コロナウイルスに感染して、外に出られないときに、近所の人が買い出しに行ってくれた」とか、「コロナウイルスに感染して、入院していた人が、退院したときに『元気になって良かった。』と言われて嬉しかった」とかいう話を聞くと、コロナ禍でもコロナ禍なりの助け合いの方法もあるのかな、と感じました。そして、助け合いの大切さを改めて実感しました。

私は、助け合うために大切なのは心の距離だと思います。親しい人ほど助け合いやすく、また、更に親しくなることができると思います。私は人見知りなので、特にそうなのかもしれせん。私の家族が困っていると、「どのようなことをすれば助けることができるのかな」と自ら考え行動したら、家族に「手伝おうか？」と言って助けることもできます。しかし、例えば見知らぬ近所の人と思われる高齢の女性が、重そうな荷物を持って、つらそうに歩いているのを見ても、私は何もできないと思います。「手伝いましょうか。」と言えばよいのかもしれませんが、実は荷物は思っているより軽くて、女性は別に困ってなくて、そんな中「手伝いましょうか。」などと言おうものなら、逆に相手に失礼なのではないか、と考えてしまうと、どうしても何もできないと思います。向こうからやって来るのが母ならば、走って駆け寄って、「荷物持つよ」と言える自信はあるのですが。でも、私は変わりたいと思いました。

そんな私に転機が訪れました。ある日、学校で知らない人に道を訪ねられたのです。「今、急いでいるので。」など、言い訳して逃げることは可能でしたが、変わりたいと思っていたので、案内することにしました。とても緊張しましたが、なんとか案内し終えると、その人は、「ありがとう。」と言ってくださいました。お礼を言われたのと、誰かの役に立てたのと、一歩踏みだせたことで、とても嬉しい気持ちになりました。そのことをきっかけに、これからも困っている人を、知らない人でも、助けられるようになりたいと思いました。

人を助けることは大変なことだと思います。今の世の中は、SNS が世界を結び、匿名で発言することにより交流が薄くなったり、発言の責任が軽くなったりし、近所との付き合いも浅くなりつつあると思います。そのような中でも、相手を想い、助け合うことは、相手の為にも、自分の為にもなります。世の中の人全員が、助け合って生きれば、誰もが生きやすい世界になるのではないでしょうか。私は、いつかそんな世界を見てみたいです。一秒でも早い、誰もが生きやすい世界の実現を願います。